



中国人日本語学習者の外来語使用に対する一考察： 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」を用いた調査をふまえて

鄧, 琪

(Citation)

Learner Corpus Studies in Asia and the World, 3:241-261

(Issue Date)

2018-03-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/81010130>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010130>



中国人日本語学習者の外来語使用に対する一考察
 —「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」を用いた調査をふまえて—
 鄧 琪(神戸大学・大学院生)
 dengqixq123@gmail.com

Use of Katakana Loan-words by Chinese Learners
 —An Analysis Based on the I-JAS—
 DENG Qi (Kobe University, Graduate Student)

概要
 本研究では中国語を母語とする日本語学習者のための外来語指導の必要性を検証するため、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS)を用い、中国語母語話者の外来語の使用特性について考察する。具体的には、(1)延べ語数・(2)異なり語数・(3)語彙レベル・(4)誤用数・(5)上位語という5つの観点から、中国語・韓国語・英語母語話者と日本語母語話者との比較を行う。また、中国語・韓国語・英語母語話者の各習熟度の間にどのような差異があるかを考察する。最後に、これらの観点を総合して考察し、得られた知見をどのように日本語教育に活かせるか検討する。

キーワード
 外来語, 学習者コーパス, 日本語教育

1. はじめに
 日本語の語彙には、和語・漢語・外来語・混種語の4種類が存在する。以下は各語種の例である。

表1 各語種の例

語種	例
和語	くるま・言う・休む
漢語	自動車・返事・休憩
外来語	カー・ラーメン・リラックス
混種語	ナイロンザイル (外+外)・原子力エンジン (漢+外)・輪ゴム (和+外)

まず、和語とはもともと日本語の語彙体系に存在し、現在でも日本語の語彙の中核をなしているものである。次に、漢語とは中国語より取り入れられ、現在においては通例漢字で表示され、音読みされるものである。また、外来語とは主として中国語以外の他の語から取り入れた語彙を指す。外来語のもととなる言語にはさまざまなものがあり、ヨーロッパ

諸言語から借用した語やその他の言語から借用した語、また、中国語の近代音から取り入れた語も含まれている（小川・林，1982）。以下は異なる言語に由来する外来語の例である。

表 2 主な語源の外来語の例

語源	実例
英語	ライト・ドラマ・ハウス
フランス語	アンティーク・バレエ・デッサン
ドイツ語	アルバイト・トラウマ・アレルギー
ポルトガル語	カボチャ・カステラ・タバコ
中国語	ラーメン・マージャン・チンジャオロース

最後に、混種語とは和語と漢語、和語と外来語など異なる性質の語種が混合して 1 つの複合語を構成するものである。

では、これら 4 種の語彙はそれぞれどの程度存在しているであろうか。国立国語研究所が 1962 年に刊行した『現代雑誌九十種の用語用字』によると、現代日本語の語彙に占める 4 つの語種の比率は以下の図 1 のようになる。

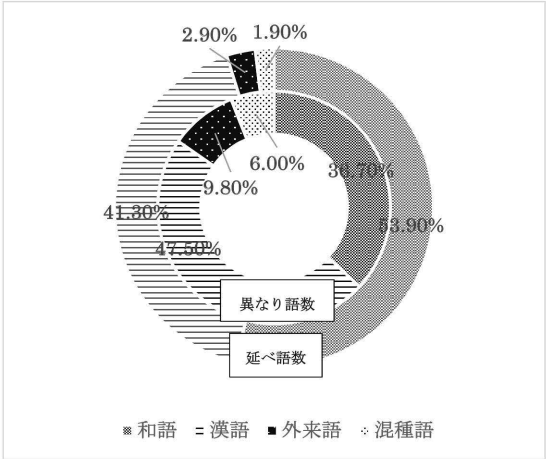


図 1 語種別異なり語数と延べ語数（百分比）
国立国語研究所（1962）のデータを引用して筆者が作図

延べ語数で見ると、最も多いものは和語（53.9%）で、漢語（41.3%）はそれに次ぐ。また、外来語（2.9%）及び混種語（1.9%）の割合は相対的に少ない。一方、異なり語数に注目すると、先ほどと

は異なり、漢語(47.5%)が最も多く、それに和語(36.7%)が続く、また、外来語(9.8%)及び混種語(6.0%)の比率も延べ語数の場合より大きくなっている。

では、これらの4種の日本語語彙のうち、日本語学習者にとって最も問題の多いのはどれだろうか。先行研究の多くは外来語が学習者の日本語習得のボトルネックになると指摘している。仮に外来語が日本語の語彙の中でほとんど使われていないとするならば、この問題も比較的に小さいと言えるが、前述の調査結果で示したように、外来語は日本語の異なり語数の10%近くを占めている。外来語が日本語習得の制約になるのは以下の5つの理由がある。

1 点目は日本語教育の現場において4種類の語種の中で外来語の指導がほとんどないためである。日本語教材や日本語教師は主として和語と漢語を教えるが、外来語については特別なものと見なし、授業の中で体系的に取り扱って指導することが極めて少ない。2 点目は類推が効かないことである。漢字の知識がある学習者の場合、漢語であれば、ある程度想像を働かせて意味を類推することができる。しかし外来語については、こうした類推を働かせることがほとんどできない。3 点目は音の表記が特殊だということである。海外の学習者は英語などの原語における当該語の発音を知っている場合が少なくないが、日本語の外来語は必ずしもその音を正確に写し取ったものになっていない。開音節化(子音に母音を付加して母音化してしまうこと)や他の発音変容によりもとの発音とは大きく異なったものになっている(big→ビッグ/camera→カメラ)。ゆえに、原語においてその語を知っていることが外来語理解の助けになるというよりもむしろ制約になるのであろう。4 点目は外来語が原語にはない新しい意味を獲得している場合があるということである(super←→スーパー=スーパーマーケット)。5 点目は表記にぶれがあるということである(メール→メイル)。

こうした制約がある中で、中国語母語話者やその他の母語を持つ日本語学習者が日本語の外来語をどのように習得し、どのように産出しているかは必ずしも明らかではない。そこで、本研究は大規模な学習者コーパスを使用し、中国語母語話者と、韓国語および英語母語話者の産出データを分析し、外来語使用の状況を検討していく。

2. 先行研究

外来語全般に関する研究として、筆者は鄧(2017a)において、日本へ留学を希望する中国人学習者のため、日本語テキストの読解に注目すべき外来語語彙を特定した。また、鄧(2017b)において、国立国語研究所によって言い換え対象とされた176語の外来語の経年的な頻度調査を行い、外来語の定着パターンを調査した。これら2つの研究を含め、日本語外来語の諸相を調査した研究は他にも多い。

以下では中国語母語話者の外来語習得に関する研究と、学習者コーパスを使った外来語研究の2つのタイプの先行研究に絞って代表的なものを概観する。

まず、中国語母語話者の外来語習得について、安(2011)は日本語学習者の外来語習得にどのような問題があるかを明らかにするため、日本語学校の中級クラスの生徒58名を中級学習者として、日本語学校上級クラスの生徒と大学生の合計53名を上級学習者としてアンケート調査を行った。調査内容は、a.英語の表記を示して日本語のカタカナ語で書いてもらい、b.事前に録音した

日本人のカタカナ語の発音を聞き、カタカナ語を書いてもらい、c.問 a と問 b の中でどちらが難しかったのかを質問し、d.普段カタカナ語をどのように覚えているかを質問する、というものである。調査結果から、(1)長音の誤用が最も多いこと、(2)カタカナ語の聞き取り能力はレベルが上がるにつれて必ずしも伸びるものではなく、また日本語能力が上がることでカタカナ語に関する自信や理解も必ずしも深まらないこと、(3)母語干渉による誤用より、英語の学習経験から共通した誤用のほうが多く見られること、(4)英語の学習経験を生かし、カタカナ語を覚えようとする学習方法には限界があることなどがわかった。日本社会におけるカタカナ語の扱われ方は日本語教育現場や日本語学習者における扱われ方と大きなずれがあることがわかった。

岡本(1996)は中国人日本語初級レベルの学習者の外来語習得戦略を見るため、中国赴日留学生予備学校博士班で日本語教育を受ける中国人研究者 76 名を対象に、外来語の聞き取りテストを行った。聞き取りテストの問題としては、学習者が日ごろの教室活動で発音に問題があった語彙を短文にして出題し、回答はひらがなかカタカナを表記させるものである。当該研究は回答中単語にのみ注目し、カタカナ語の表記にどのような誤用が生じるかを見る。その結果、調査対象者の大半は英語学習経験を持っているため、外来語の習得戦略としては、日本語よりも、なじんでいる英語に基づいて習得しようとするのがわかった。中国人学習者による英語を原語とする外来語の語彙習得ステージは、(1)日本語のカタカナ表記初期認知、(2)英語での意味理解、(3)母語英語化発音を元にした記憶、(4)日本語音化した記憶、(5)カタカナ表記定着という 5 段階に分けられる。また、学習者は外来語を英語の音として認知する傾向があるわけだが(上記の(3))、この期間を短縮し、日本語音に学習者の注意を向けさせるには、誤用に焦点を絞った指導が必要であるという示唆が示された。

また、学習者コーパスを使った外来語研究について、羅(2010)は台湾の日本語学習者のカタカナ語彙の習得状況を調査し、外来語教育の在り方を考えるため、LARP at SCU という学習者コーパスの作文資料を使い、縦断的分析を行った。この研究では被験者 3 名が大学 1 年生から 4 年生にかけて書いた 33 回の作文を分析サンプルとして、カタカナ語彙の使用特徴を初期、中期、後期という三段階に分けて検討した。具体的には、カタカナ語彙の(1)延べ語数と異なり語数、(2)日本語化による品詞分類、(3)教科書で出ているカタカナ語との比較、(4)誤用という 4 つの観点から考察した。結果としては、(1)'カタカナ語の使用量には個人差があるが、作文における出現率が総じて低いこと、(2)'副詞化したカタカナ語(例:クールに)、単語の前半を省略したカタカナ語(例:(オート)バイク)は全く使われず、加えて、形態素省略なし(例:スポーツ)や混種語(例:高層ビル)以外のカタカナ語にてについても使用される種類が少ないこと、(3)'教科書に出てくるカタカナ語だけでなく、それ以外のカタカナ語も使用していること、(4)'全般的に誤用は少ないが、表記の間違い・語彙選択の間違い・文法関係の間違いなどがあることが明らかになった。

これらの研究は重要な知見を示したが、大規模な学習者コーパスを利用した学習者の外来語使用研究は必ずしも多くない。また、学習者コーパスを使用している場合でも、学習者の習熟度や、他の母語話者との比較もほとんど行われていない。本研究はこれらの制約の解決を目指す。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的と RQ

既に述べたように、本研究では大規模な日本語学習者コーパスを利用し、様々な習熟度段階にある中国語母語話者の外来語の使用実態を明らかにすることを目指す。なお、比較対象として、韓国語および英語母語話者、また日本語母語話者のデータにも注目する。「外来語使用」という概念は極めて広範であるため、本研究では外来語使用の基礎的指標として、延べ語数・異なり語数・語彙レベル・誤用数・上位語の 5 点に着目する。

以上をふまえ、本研究は以下の 3 つの RQ を設定した。

RQ1 「外来語使用」にかかわる 5 つの観点について、中国語母語話者は、韓国語・英語母語話者、および日本語母語話者とどのような違いがあるか？

RQ2 「外来語使用」にかかわる 5 つの観点について、異なる習熟度段階の中国語母語話者は、韓国語・英語母語話者、および日本語母語話者とどのような違いがあるか？

RQ3 「外来語使用」にかかわる 5 つの観点に基づく、異なる習熟度段階の中国語母語話者は、韓国語母語話者・英語母語話者・日本語母語話者とどのように関係しているか？

3.2 データ

本研究は「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(以下、I-JAS)を使用する。I-JAS は 12 種の異なる母語を持つ学習者と日本語母語話者の発話・作文データを収集した大規模学習者コーパスである。2017 年 7 月時点において、公開されている日本語母語話者、中国語・韓国語・英語母語話者のデータはそれぞれ 50 人である。I-JAS では学習者の多様な産出を引き出すため、ストーリーテリング(2タスク)・対話(約 30 分)・ロールプレー(2タスク)・絵描写・ストーリーライティング(2タスク)・メール文(3タスク)・エッセイという 12 種のタスクを行わせているが、タスクの中には、特定の外来語が極めて多く出現するものもあるため、本研究では、相対的に分量が多く、かつ発話産出の自由度が高い対話タスクのみを選んで分析する。

3.3 手法

RQ1(母語別の比較)を行うには、それぞれの学習者グループの習熟度を統制する必要がある。この点に関して、本研究では I-JAS で収集された学習者の J-CAT 成績を参照する。J-CAT は習熟度を 7 段階に分けているが、本研究は初級を A 級・中級前半を B 級・中級を C 級・中級後半を D 級・上級前半を E 級・上級を F 級・母語話者相当を G 級というように呼ぶ。以下は、各レベルの学習者数である。

表 3 I-JAS の母語別学習者の各習熟度にあたる人数

	中国語母語話者	韓国語母語話者	英語母語話者	合計
初級(A 級)	0	1	7	8

中級前半(B級)	1	5	13	19
中級(C級)	11	6	16	33
中級後半(D級)	16	13	12	41
上級前半(E級)	18	14	2	34
上級(F級)	3	10	0	13
日本語母語話者相当(G級)	1	1	0	2

以上に明らかなように、7段階の中には、データ数が少ないものが存在する。そこで、本研究では、初級(全8人)・上級(全13人)・日本語母語話者相当(全2人)の3つのレベルを分析対象から除外することとした。

また、もう1つの問題は、以上の3つのレベルを除去したとしても中国語母語話者・韓国語母語話者・英語母語話者間でレベルが必ずしも一致していないということである。そこで本研究はサンプル数の多い4段階(中級前半～上級前半)の各々について、以下のようにサンプル数を絞ることとした。

表4 本研究で分析対象とするデータ数

	中級前半	中級	中級後半	上級前半	合計
人数	1	6	12	2	21

上記は3つの母語話者間で最も少ない人数に合わせている。すべての母語話者について、上記の人数に揃えることで、内部的な習熟度の違いを顧慮せず、母語話者別の分析を行うことが可能になる。

既に述べたように、本研究では外来語使用を5つの観点から見ていくわけであるが、(1)延べ語数については(延べ語数/総語数)*1000という調整式により1000語あたり頻度に統一する。(2)異なり語数についても同様に処理する。なお、ここで得られる値は一般にタイプ・トークン・レシオと呼ばれる値に一致する。(3)語彙レベルについては、旧日本語能力試験で示されていた語彙基準に基づく。具体的には、旧日本語能力試験で示されていた語彙レベルを自動判定する日本語読解学習支援システム「リーディング・チュウ太」を用いる。(4)誤用数については各学習者の誤用の延べ語数を数え、(誤用数/総語数)*1000という調整式により1000語あたり誤用数を計算する。なお、1つの単語について、間違いを16種のタイプに分類し、どのタイプの間違いが最も多く出現しているかを確認する。(5)上位語については、中国語・韓国語・英語母語話者と日本語母語話者の上位10語を抽出して比較する。ただし、上位10語目と同等頻度のものが存在する場合はそれらも含めて比較する。また、すべての観点において、中国語・韓国語・英語母語話者と日本語母語話者のデータをノンパラメトリック検定のクラスカル・ウォリスで検証する。

RQ2(習熟度別の比較)では、既に表3で示したA～Gの7段階ごとに5つの観点を比較して

いく。RQ1 では全体のサンプル数少ない A 級・F 級・G 級を分析から除外したわけであるが、ここではより幅広い習熟度を調査対象とするため、こうしたサンプル数の少ないものも分析対象に加える。ただし、サンプル数が少ない場合が多いため、統計的検定を行わない。

RQ3(全学習者間の総合関係)では、中国語・韓国語・英語母語話者の各習熟度段階(A～G 級をすべて含む)と日本語母語話者という 19 種の話者グループを第1アイテムに、延べ頻度・異なり頻度・語彙レベル・誤用数・上位語という 5 つの観点を第 2 アイテムとして、コレスポンデンス分析を行う。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 母語別の比較

中国語・韓国語・英語母語話者と日本語母語話者の外来語使用特性は以下の表 5 のようにまとめられる。

表 5 中国語・韓国語・英語母語話者と日本語母語話者の外来語使用特性

	延べ語数	異なり語数	語彙レベル	誤用数	上位語
中国語母語話者	26.49	13.50	2.64	2.84	ドラマ, アニメ, <u>ケーキ</u> , <u>プレゼント</u> , <u>ラーメン</u> , パソコン, クラス, ゲーム, テレビ, <u>バス</u> , インターネット
韓国語母語話者	34.17	20.44	2.38	5.55	ソウル, アニメ, バイト, <u>ドラマ</u> , <u>ケーキ</u> , <u>プレゼント</u> , ソース, ストーリー, <u>バス</u> , <u>ゲーム</u> , スープ, パーティー
英語母語話者	51.08	30.75	2.12	2.40	シドニー, オーストラリア, <u>ドラマ</u> , アニメ, <u>バス</u> , <u>クラス</u> , <u>ゲーム</u> , レストラン, アメリカ, アリゾナ
日本語母語話者	33.57	21.48	2.23	0.00	テレビ, <u>ケーキ</u> , <u>ドラマ</u> , <u>プレゼント</u> , パン, サッカー, クラス, ストーリー, <u>バス</u> , <u>ラーメン</u> , <u>ゲーム</u>

クラスカル・ウォリス検定を行った結果、延べ語数・異なり語数・語彙レベルという 3 つの観点について、話者間で 0.1%水準で差があることが示された。また、誤用数についても、1%水準で差があることが示された。なお、話者間の下位検定の結果については以下で述べる。

以下、5 つの観点について順に概観していく。まず、(1) 延べ語数については、中国語母語

話者の外来語使用量は、日本語母語話者の約 79%、韓国語母語話者の約 78%、英語母語話者の 52%となった。下位検定の結果、韓国語母語話者とは差がないが、英語母語話者との間に有意な差が確認された。また、日本語母語話者の間にも有意傾向が確認された。中国語母語話者は日本語の外来語使用が母語話者や英語母語話者より少ないと結論できる。

(2) 異なり語数については、中国語母語話者の外来語使用量は、日本語母語話者の約 63%、韓国語母語話者の約 66%、英語母語話者の 44%であった。下位検定の結果、中国語母語話者は他のどの母語話者よりも使用する外来語の種類が少ないことが確認された。戸田(1999)は、学習者の OPI 発話を収集した「KY コーパス」を分析し、外来語の使用頻度は英語母語話者が最も多く、韓国語母語話者がそれに次ぎ、中国語母語話者が最も少ないと述べたが、今回の分析において延べ語数についても、異なり語数についても完全に同じ傾向が確認された。

母語話者のみならず、他の母語話者よりも中国語母語話者の外来語使用量が少ないのはなぜなのであろうか。この点に関しては中国語の母語影響が考えられる。中国語においては、視覚的にははっきり認められる外来語が存在しない。中国語でも外国語の語彙を導入することがないわけではないが、意識されたり音訳されたりして、すべてが漢字表記されるため、外来語であることが分かりにくくなっている(たとえば、コココーラ→可口可乐(音訳)・テレビ→电视(意識)など)。こうしたことから、中国語母語話者は 1 つの言語の中に、他の言語をそのまま取り入れて使うということ自体になじみが薄く、このために、日本語においても、外来語を極めて少なく使用しているのではないかと考えられる。

次に、(3) 語彙レベルについては、中国語母語話者の使用する外来語の平均的語彙レベルは日本語母語話者より 18%、韓国語母語話者より 11%、英語母語話者より 25%低かった。すなわち中国語母語話者は他の話者よりも、より基本的なレベルの外来語を使用していることになる。下位検定により、中国語母語話者とその他の話者の間すべてに有意な差が確認された。この点も既に述べた原因で説明できるであろう。つまり、母語において、はっきりした外来語使用の経験を持たない中国語母語話者は日本語における外来語の使用になじみがなく、仮に使うとしても極めて基本的なものに限られると思われる。

(4) 誤用数については、中国語母語話者は 1000 語あたり 2.84 回の誤用を犯す。これは韓国語母語話者より 49%少なく、英語母語話者より 18%多いことになる。下位検定の結果、韓国語母語話者との間に有意な差が確認されたが、英語母語話者とは有意な差が確認されなかった。誤用数について中国語母語話者は最上位ではなかったものの、一定の確率で誤用を行っていることは注目値する。

では、中国語母語話者はどのようなタイプの誤用を犯しているのであろうか。韓国語・英語母語話者と比較してみることにしたい。学習者の日本語使用における誤用のパターン分類については様々な立場が提唱されているが、本研究では筆者の質的観察に基づき、まず、誤用の発生する要素として母音・子音・長音・促音・撥音の 5 種類の音素タイプを区別する。また、これら 5 種類の音素に関して、具体的な誤用パターンを区分する。加えて、特定の音素と結び付けられない誤用として原語の影響および語彙選択の違いという 2 つ

のカテゴリーを立てる。これらにより、18種の誤用タイプを分類し、それぞれの出現率を調べたところ、以下の結果を得た。(この分析では、1つの用例に複数の誤用タイプを認定している)。

表6 学習者の誤用タイプ

誤用タイプ		中国語母語話者の誤用例	中	韓	英
母音	音素の混同	だい <u>も</u> (ダム)	17%	19%	34%
	音素の添加	だい <u>む</u> (ダム)	9%	3%	7%
	音素の脱落	あいる <u>ばっ</u> と(アルバイト)	9%	4%	5%
子音	音素の添加	ユーモ <u>ろ</u> (ユーモア)	8%	2%	0%
	音素の脱落	<u>エ</u> ストラン(レストラン)	7%	3%	6%
	有声無声の間違い	<u>ラ</u> ブ(ラブ)	13%	8%	1%
	調音位置の間違い	<u>カン</u> ダ(パンダ)	3%	11%	5%
	調音法の間違い	キャン <u>ナ</u> ル(キャンドル)	5%	7%	7%
長音	長音の添加	コ <u>ー</u> ピー(コピー)	9%	18%	8%
	長音の脱落	ば <u>ー</u> すてい(バースデイ)	5%	11%	7%
	長音と促音の混同	ケ <u>ッ</u> キ(ケーキ)	2%	3%	2%
	長音と撥音の混同	ナ <u>ー</u> メ <u>ー</u> (ラーメン)	1%	0%	0%
促音	促音の添加	ば <u>っ</u> す(パス) (英語母語話者の誤用例)	0%	1%	3%
	促音の脱落	ネ <u>ト</u> バ(ネットバー)	2%	6%	1%
	促音と撥音の混同	ば <u>ん</u> ぐ(バッグ)	1%	0%	0%
撥音	撥音の脱落	コウ <u>ト</u> (カントン)	2%	0%	1%
原語の影響	開音節化失敗による音節脱落	ビルディ <u>ン</u> (ビルディング)	7%	6%	12%
語彙選択の間違い	語彙選択の間違い	インタ_ <u>ピ</u> ュー(インターネット)	2%	0%	1%

表6によると、中国語母語話者は全18種の誤りタイプの内、促音の添加を除く17種において誤用を犯している。ただし、誤用率は必ずしも高いものではなく、母音における音素の混同は17%、子音における有声無声の間違いが13%で、これら2種の間違いが突出している。では、中国語母語話者はなぜこれらのタイプの誤用を犯しやすいのであろうか。まず、母音音素の混同については、原語の発音からの影響が考えられる。たとえば、「餃子」について言えば、「jiaozi」という母語における発音の影響で、「○ギョウザ」ではなく「×ギョウズ」と間違えて発音した例が見られた。また、英語「online」について言えば、「₁.a:n'lam」という原語における発音の影響で、「○オンライン」ではなく「×アンライン」と間違えて発音した例が見られた。次に、有声無声の違いについてであるが、

中国語では呼気流量の大小によって生じる有気音と無気音で意味上の区別がされるのに対し、日本語では声帯が振動するか否かという有声音・無声音で意味上の区別がなされる。ゆえに、中国語母語話者はたとえば「大学」「退学」「体格」を混同する誤りが多いとされる(吉廣・2003)。今回分析したデータは学習者の発話データの書き起こしであるが、有気音と無気音をすべて無声音として扱ったため、このような誤用が多く出現したと考えられる(○ラプー×ラプ)。

では、他の母語話者と比較した場合、中国語母語話者の外来語の誤りにはどのような特徴があると言えるであろうか。ここでは、全 18 種の誤りタイプの内、中国語母語話者が他の母語話者の最大値よりも 2 倍以上多く誤用を犯している子音タイプに注目する。該当するのは、子音音素の添加型の誤用のみであった。子音の誤用について言えば、今回のデータでは子音「r」の添加に限定されていた(○ユーモア(humor)→×ユーモ^ラ/○タワー(tower)→×タウル/○ソード(sword)→×ソールド)。これは中国語母語話者が英語学習経験を持つため、原語の中の「r」を日本語の外来語に転移させた結果なのではないかと考えられる。

最後に、(5)上位語については、中国語母語話者は他の学習者に比べ、母語話者の使用する外来語と同様のものを使用している傾向が強いことがわかった。母語話者が使った上位 10 語の内、8 語を中国語母語話者もまた同様に使用している。この重なりについて言うと、韓国語母語話者より 3 語多く、英語母語話者よりは 4 語多い。中国語母語話者が使用した外来語上位語は日本語母語話者ともっとも近いと言えるであろう。この点については、中国語母語話者は全般的に外来語を過少使用し、使用する外来語も基本的なものに限られているため、結果として中国語母語話者固有の特徴が表れにくかったためと考えられる。

以上の 5 点をまとめると、中国語母語話者は延べ語数においても異なり語数においても、母語話者のみならず、他の学習者よりも外来語を過少使用している傾向が示された。また、語彙レベルについても最も基本的な語彙を使っていることが示された。一方、誤用数について中国語母語話者は韓国語母語話者より誤りが少ないものの、それでも 1000 語あたり 2.84 回程度の誤用を犯していることが確認された。また、誤用タイプについて言うと、中国語母語話者は母音音素の混同と有聲無聲の間違いという 2 種類の誤用が最も犯しやすく、他の学習者に比べ、子音音素の添加型の誤りが多いことが示された。さらに、上位語使用については、中国語母語話者は日本語母語話者との差が最も少ないことが明らかになった。

中国語母語話者は外来語のなじみの少なさが注意深い外来語使用に繋がり、結果として日本語母語話者と相対的に類似した外来語使用パターンを示していることが確認された。一般に、新しい言語を習得する上では、インプットの中から自分なりにルールを抽出し、ルールを新しいデータに適用し、場合によって間違いを犯すことで、ルールの修正を行っていくというプロセスが必要となる。この点をふまえて言えば、使う自信がないから使わないという中国語母語話者は、他の母語話者と比べ、外来語の上達が起こりにくい可能性が示唆された。

4.2 RQ2 習熟度別比較

中国語母語話者といっても、その日本語習熟度は様々である。習熟度の段階が異なれば

どのように日本語の外来語使用傾向が異なるのであろうか。この点を調べるために中国語母語話者、及び、比較対象とする韓国語・英語母語話者について習熟度を6段階に区分し、それぞれの外来語使用特性を調査したところ、以下の結果を得た。

なお、既に述べたように、中国語母語話者の初級レベル、また英語母語話者の上級・日本語母語話者相当レベルについては、該当する学習者数が0であったため、分析対象には含めていない。また、上位語については、紙幅の関係で、個別語の記載を省略し、母語話者の上位10語との一致率のみを示す。

表7 習熟度別中国語・韓国語・英語母語話者の外来語使用特性

	習熟度	延べ語数	異なり語数	語彙レベル	誤用数	上位語 (%) (一致率)
中国語母語話者	中級前半	33.51	13.14	2.95	0.66	30
	中級	23.86	13.46	2.79	2.64	70
	中級後半	25.39	13.20	2.66	2.37	70
	上級前半	25.98	13.02	2.54	1.89	50
	上級	21.27	13.36	2.56	0.66	60
	日本語母語話者相当	22.79	14.59	2.47	0.91	50
韓国語母語話者	初級	59.25	21.54	1.29	22.44	0
	中級前半	44.05	23.90	2.39	9.52	40
	中級	37.33	23.27	2.17	7.88	20
	中級後半	32.90	19.28	2.45	4.97	50
	上級前半	25.78	15.62	2.46	2.65	40
	上級	26.66	15.46	2.24	1.31	30
	日本語母語話者相当	17.11	11.41	2.39	1.27	30
英語母語話者	初級	44.77	27.34	2.36	5.20	30
	中級前半	57.17	34.67	2.14	7.53	40
	中級	57.30	32.93	2.10	3.47	40
	中級後半	45.62	29.38	2.03	2.63	30
	上級前半	45.21	31.82	2.09	1.20	40
日本語母語話者		33.57	21.48	2.23	0.00	100

以下、5つの観点について順に結果を分析していく。まず、(1) 延べ語数と(2) 異なり語数について、各母語話者の習熟度別外来語使用量は以下のように変化していた。

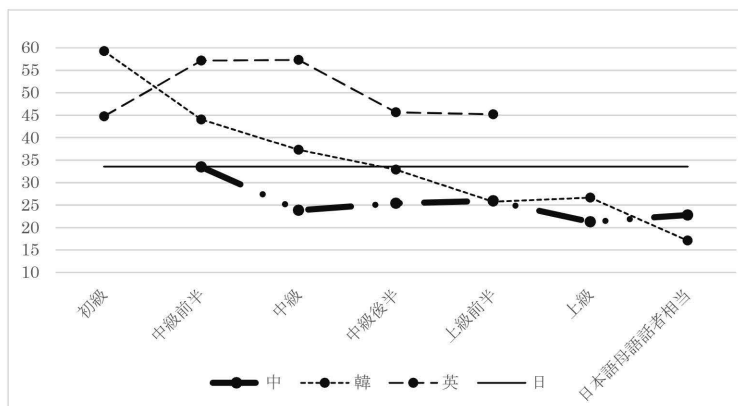


図2 習熟度別中国語・韓国語・英語母語話者の外来語延べ語数

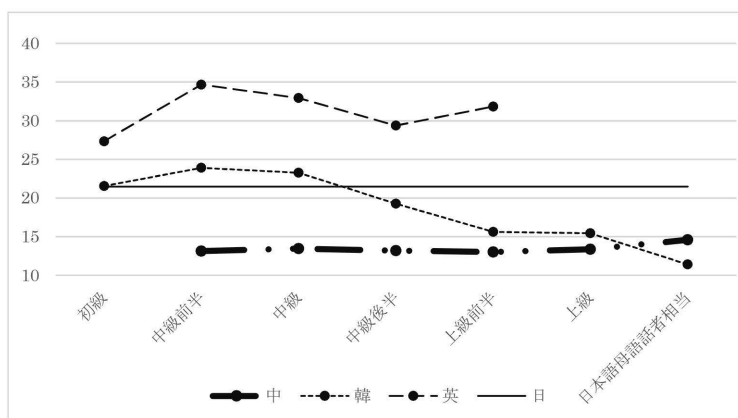


図3 習熟度別中国語・韓国語・英語母語話者の外来語異なり語数

図2・図3で明らかのように、中国語母語話者の場合、述べ語数は中級前半から中級にかけて低下し、以後も上級・日本語母語話者相当レベルになるにつれて微減している。また、異なり語数についてもほとんど変化していない。

このように習熟度の上昇によって、外来語使用量は増加せず、むしろ減少する傾向は中国語母語話者のみならず、すべての学習者に認められるものである。その原因としては、様々な要因が考えられるが、データを質的に分析した結果、外来語使用量が増加せず、む

しろ減少することは学習者の全般的習熟度の上昇によって説明できることが明らかになった。つまり、初級者は様々な要因により外来語を反復使用しているが、習熟度が上昇するとうした反復がなくなり、結果として外来語の使用量が増加しなかったり、あるいは減少したりするのである。

では、なぜ初級者は外来語を過剰に使用するのであろうか。この理由としては、(1) 流暢性の不足を補うための単語の自己反復、(2) 言い間違いの言い直し、(3) 日本語がとっさに出てこない場合の外来語による臨時的代用の3つの原因があると思われる。

まず、(1) について以下の用例を見てみたい。これは中国語母語話者と日本語母語話者の会話の一部である。

表 8 学習者の実例 1 (CCM53-I-00830～CCM53-I-00860)

調査者	それからどうしました？
学習者	あーそれから、んー、 <u>スーパー</u> で、〈うん〉 <u>スーパー</u> に、えー行くー〈うん〉、くと、ショッピングします〈うんうん〉、はい、んーそれからーあー、晩ご飯を食べるー、えーえー、学校で、散歩します〈うん〉、んーそれからー、えー寮に帰るー、〈んんん〉これ、えー <u>パパソコン</u> を、 <u>パソコン</u> をします、しました〈うんうんうんうん〉、はい、それからー、多分ー十、十一時、十一までね、寝ています、た (いました)、はい
調査者	そう、で、今日は遅かったのね〈はいはいはいはい〉、十二時まで寝たのね
学習者	はい、はいはい、十二時、はい、十二時頃

上記に明らかのように、自分の話すスピードに語彙力が追いついていないため、それによって生じる会話のポーズを埋めるために、それぞれの語を反復している。こうして「スーパー」や「パソコン」といった語についても同じ語をそれぞれ 2 回づつ使用している。こうした反復は外来語のみに見られるわけではなく、ほぼすべての語について自己反復が認められる。このように初級はしばしば流暢性を補うための外来語の自己反復を行っている。

次に、(2) について以下の用例を見てみたい。

表 9 学習者の実例 (CCM28-I-03260～CCM28-I-03290)

学習者	んー、あー一般のーサーリーマン (サラリーマン) と同じ、同じれ、おなれば (同じであれば)、いいと思います
調査者	ん？もう一度お願い
学習者	い、一般、あー一般の同じ、あん、いん、一般のサーリーマン (サラリーマン) と同じー、なら、あーふつ (普通) のあーサーリーマン (サラリーマン) と同じ

調査者	ああ、サラリーマン、と〈はい〉うんうんおんなじー、〈はい〉会社に入っ てー〈うん〉 どうして広告を選んだんですか？
-----	--

ここでは、学習者が本来「サラリーマン」と言うべきところを「サーリーマン」と言っ
てしまったために、調査者から確認がなされ、その確認を答える形で、その語を反復して
いる（なお、本分析においてはこのような外来語の誤用も外来語の出現例に含めているこ
とを確認しておきたい）。微妙な発音の差など問題が小さい場合、調査者はあえて確認を行
わない場合もあるが、初級者はしばしば逸脱した語形や発音を行うため、調査者が発話の
内容を確認する場面が増えている。なお、こうした減少は中国語母語話者のみならず、英
語母語話者や韓国語母語話者にも認められる。

最後に、(3) についてであるが、このタイプの過剰使用は中国語母語話者には比較的少
なく、韓国語母語話者や英語母語話者に多く見られるものとなっている。以下は用例を見
ていきたい。

表 10 学習者の事例 4 (KKD34-I-01480)

学習者	あ私は子供の時ー〈はい〉、あかんこっくーの（韓国の） <u>ジュラーイ</u> は、 〈はい〉雨のけつ（月。読み誤りか）？、〈はい〉ですからー〈はい〉、パ ッティー（パーティー）、は、ぜんぜんやらなかった（やらなくて）ー
-----	--

表 11 学習者の事例 5 (KKD26-I-04170)

学習者	おおそれ、でんん時間が、たくさんあります〈はい〉ありま、すけど〈は い〉、私が変わる、変わり続け、て〈はい、はい〉おお、{笑}それで、お お{笑} <u>オールオールドピープル</u> 〈ああ〉 <u>オールドパーソン</u> 〈はあ、はい〉 で、 <u>オールド人</u> （ひと）でんんすぐに住み続け、る、は〈んんんうんー〉 ん私はちよっと
-----	--

表 12 学習者の事例 6 (EAU30-I-00430～EAU30-I-00450)

調査者	でもそのじゃあ日本は面白い文化と思ったとこ、中で特にどんなことにこうかん 興味がありましたか？
学習者	どんなことを？あの英語で難しいあの、あーレリ、レリジョン(宗教)、あの神とか あの神道の、神道と <u>ブディズム</u> 、〈あー〉あの〈はいはい〉 <u>プラクティス</u> ？あー
調査者	ん？には日本語でお願いします

上記において、学習者は日本語の「七月」「老人」「仏教」という語言うべきところ、その語はとっさ
に思いつかなかったため、同じ意味を表す英語を日本語風の発音に置き換え、「ジュライ」「オー
ールドピープル」「ブディズム」といった語を使用している。初級者であればあるほど日本語の語彙

力に制約があり、このような形で外来語使用が多く認められる。ただし、ここで注目すべきは、こうしたタイプの過剰使用は中国語母語話者にはほとんど認められないことである。既に述べたように、中国語母語話者は母語の影響もあり、苦手とする外来語を全般的に使用を回避する傾向が強い。したがって、適切な日本語が思い付かず、語に詰まった場合であってもそれを外来語で置き換えようとすることはあまりない。

以上で見てきたように、中国語母語話者は習熟度の上昇によって外来語使用量は増加するわけではなく、変化しないか、むしろ減少することが明らかになった。また、その理由としては、(1) 流暢性の不足を補うための単語の自己反復、及び(2) 言い間違いの言い直しの2点が挙げられることも明らかになった。また、中国語母語話者を除き、韓国語・英語母語話者については、これらに加えて(3) 日本語がとっさに出てこない場合の外来語による臨時的代用という原因があることがわかった。

次に(3)語彙レベルについて、異なる習熟度段階の学習者が使用する外来語のレベルは以下のように変化していた。

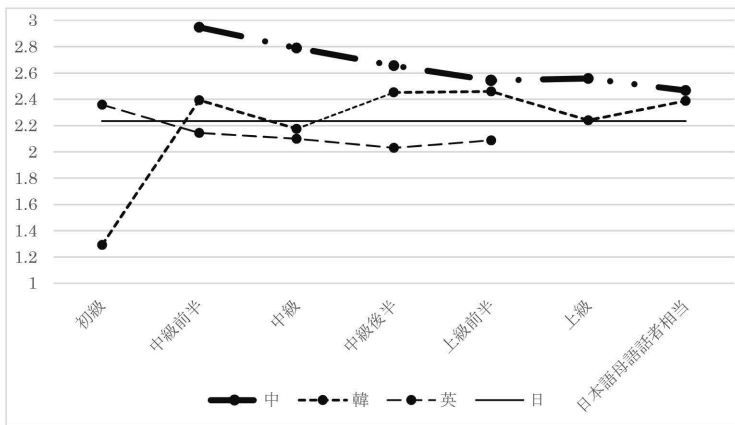


図4 習熟度別中国語・韓国語・英語母語話者の外来語語彙レベル

なお、以下は語の難度のレベルを示しているため、グラフの低下は使用する外来語のレベルが上昇し、グラフの上昇は使用する外来語のレベルの低下していることを示す。

まず、中国語母語話者に注目すると、使用する外来語のレベルは習熟度の上昇に伴って、ほぼ一貫して低下していることは明らかになった。以下は、中国語母語話者が使用している外来語の用例を見てみたい。

表 13 学習者の実例 7

	用例
中級前半 (CCM53)	(1) はい、 <u>麵</u> を食べる、 <u>うんうん</u> うーうー、き、てき、てー、き、 <u>ケーキ</u> (N4) ? てーき、きんー、 <u>パン</u> (N5) を食べる (2) <u>サッカー</u> (N4) のボールをあげるのね(はいはいはい)、で女の子には
日本語母語話者相当 (CCM51)	(1) いやあの組の一、あのラ、 <u>ランダム</u> (級外) でやってるんで(あー)、ちょうど私たちの組は全部子どもで、知らない (2) 後(あと)はちょっと <u>トラウマ</u> (級外) になってー、(うん) しばらくお化け屋敷に行けなくて

上記に明らかなように、初級者の場合は「パン」や「サッカー」のように基礎的な外来語しか使用できていないが、上級者になると、「ランダム」や「トラウマ」のような難しい外来語も使用することもできている。上級レベルでも、日本語母語話者に比べればなおレベルの低いものの、中級から上級にかけて、習熟度の上昇につれて使用できる外来語のレベルが段階的に上昇しているがここで確認される。

なお、英語母語話者についても、中国語母語話者とはほぼ同様の一貫したレベル上昇が確認された。しかし、ここで注目すべきは韓国語母語話者である。韓国語母語話者の場合、使用する外来語のレベルは初級から中級前半にかけて大きく易化している。しかし、中級前半以降に限って言えば、使用する外来語のレベルは若干上昇しているように認められる。では、なぜ初級韓国語母語話者は使用する外来語のレベルが非常に高くなってしまったのであろうか。それは既に引用した「ジュライ」「ピープル」などの用例のように、普通日本語の外来語と認定されていないものを、初級韓国語母語話者が多く使用していたためである。本研究で分析に使用した「リーディング・チュウ太」で通例日本語能力試験レベルを超える難語に対して「級外」というレベルを与えているわけであるが、初級韓国語母語話者が使用する「ジュライ」「ピープル」など能力検定の語彙範囲に含まれていない語であれば、すべて「級外」として認定してしまったため、見かけ上初級韓国語母語話者の使用している外来語のレベルが高くなった。

(4) 誤用数について、各母語話者の習熟度別外来語誤用数は以下の図 5 のように変化している。

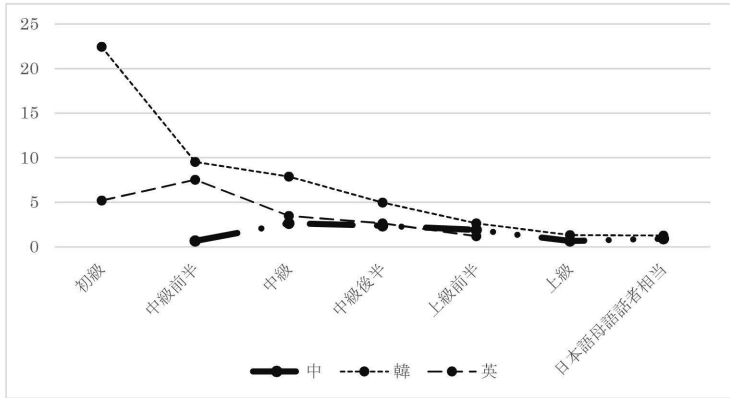


図5 習熟度別中国語・韓国語・英語母語話者の外来語誤用数

まず、中国語母語話者について見ると、中級前半から中級後半にかけて若干誤用が増えているものの、以後は減少している。中級後半の場合であっても、誤用数は2程度で、全体として見れば中国語母語話者は習熟度に関わらず、外来語の誤用をほとんど犯していないと結論できる。このことは既に述べたように、中国語母語話者が全体的に外来語使用を回避するため、真に自信のあるものしか使用しないことの影響であると考えられる。他の母語話者について言うと、韓国語母語話者の場合は初級から上級にかけて誤用数がほぼ一貫して減少していることが明らかになった。既に述べたように初級韓国語母語話者は日本語の単語がとっさに思い付かない場合に外来語を誤った形で臨時的に代用することなどが多かったわけであるが、そうしたことは習熟度の上昇につれて次第に見られなくなっているためと考えられる。英語母語話者について言うと、韓国語母語話者と同じように、初級から上級前半まで誤用数はほぼ一貫して減少している。中国語母語話者のみならず、韓国語・英語母語話者についても習熟度の上昇に伴い、外来語の誤用数はわずかであるが、減少しているように思われる。

最後に、(5)上位語について、それぞれの学習者が使用した上位10語と日本語母語話者が使用した上位10語を比較したところ、一致度(%)は以下のように変化した。

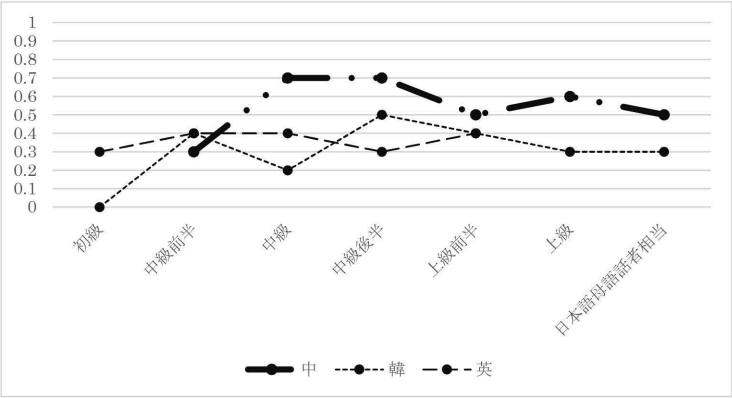


図 6 習熟度別中国語・韓国語・英語母語話者の上位語一致率

まず，中国語母語話者について見ると，中級前半では 30％程度であったが，中級レベルになると，70％程度まで上昇することがわかった。ただし，中級後半以降になると，一致率はやや減少し，50％～60％台となっている。中級から上級にかけて若干一致率が減少したものの，大きく見れば中級前半とそれ以降を分けて見れば習熟度の上昇につれて一致度は上昇する傾向があると言えるであろう。以下は，各習熟度レベルの中国語母語話者が使用した上位 10 語である。

表 14 習熟度別中国語母語話者の上位語

	習熟度	上位語
中国語母語話者	中級前半	スポーツ・ラーメン・テニス・プレゼント・オリンピック・サッカー・スーパー・パソコン・マンガ・ラケット・ワンピース
	中級	ドラマ・モンゴル・ケーキ・アニメ・プレゼント・ラーメン・クラス・コンピューター・ストーリー・インターネット・テレビ・ビル・マン・シャンハイ
	中級後半	ドラマ・アニメ・ケーキ・ゲーム・テレビ・パソコン・ラーメン・プレゼント・パーティー・パス
	上級前半	ドラマ・アニメ・ケーキ・クラス・プレゼント・パソコン・インターネット・ネット・フランス・パス
	上級	ドラマ・プレゼント・ネット・レストラン・タイプ・スペイン・ケーキ・パス・ラーメン・アイドル・インターネット・タン・テレビ・ナップ・パイ・パソコン・パターン・メリット
	日本語母語話者相当	ドラマ・ケーキ・バイト・プレゼント・メール・アイス・アニメ・クラス・トラウマ・ネット・パス・ピック・ブライド・ベ

		ッド・ランダム・ヨーロッパ
--	--	---------------

なお、他の学習者について言うと、韓国語母語話者の場合も初級から中級後半にかけて一致率の上昇が認められた。しかし、英語母語話者の場合ははっきりした一致率の上昇は認められない。3 種類の学習者を比較して見ると、中国語母語話者及び韓国語母語話者では初級から上級にかけて母語話者への近接が見られるのに対し、英語母語話者ではそうした近接が見られないことが明らかになった。このことは、日本語の外来語の多くは英語起源であることをふまえると、英語の知識が多いことが英語母語話者の使用する外来語が母語話者に近接しないことの要因になっているのではないかと考えられる。

以上まとめると、中国語母語話者について言えば、(1) 及び (2) については、習熟度の上昇につれて外来語使用量は必ずしも上昇しておらず、むしろ減少していることが示された。次に、(3) 語彙レベルについては、若干ではあるが、習熟度の上昇につれて上昇することが確認された。(4) 誤用数について言うと、中級後半とそれ以降を分けて見る場合に、誤用数は減少することが確認された。最後に (5) 上位語について言えば、中級前半とそれ以降を分けて見ると、日本語母語話者の 70% 近くまで近接することが明らかになった。また、他の母語話者と比較した場合、中国語母語話者の使用傾向は多くの点で他の母語話者とも共通するものの、全体として外来語使用を回避し、真に自信のあるものしか使用しないため、誤用がほとんどない。この点で、中国語母語話者は他の母語話者と明確に区別されることが示された。

4.3 RQ3 習熟度別の各母語話者の外来語使用の関係

以上で、5 つの観点から、母語別、また習熟度別にそれぞれの学習者の外来語使用傾向を分析してきたが、最後に、全体をまとめて分析を行うこととしたい。コレスポンデンス分析により、以下の散布図が得られた。

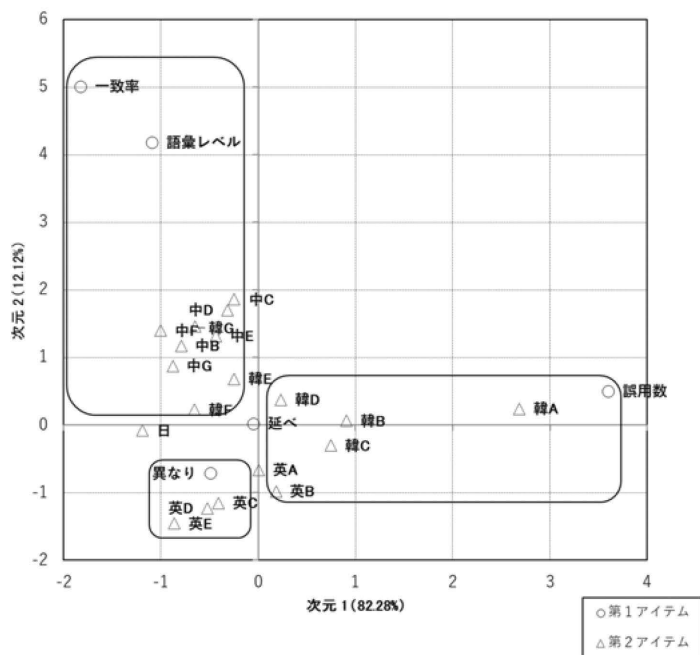


図7 コレスポンデンス散布図

まず、次元1の寄与率は82.28%、次元2の寄与率は12.12%となり、2つの次元で元のデータの分散のほぼ95%が説明されることがわかった。また、2つの軸について言えば、次元1の寄与率が極めて高く、データは全体としてグラフの左と右に2分割され、ついで上と下に2分割されることがわかった。はじめに、次元1に注目してみよう。次元1の正の方向は初級から中級後半の韓国語母語話者と中級前半の英語母語話者が含まれ、これらは誤用数によって特徴づけられている。すなわち、外来語使用の傾向というものについて言うと、誤用の数が多いかどうかは様々な学習者を区分する最も重要な観点になっていることが示された。次に、次元1の負の方向に注目してみたい。データは全体として次元2の正の方向には中国語母語話者と上級前半・上級・日本語母語話者相当レベルの韓国語母語話者が含まれる。これらの学習者は上位語の一致率、及び、語彙レベルの相対的高さによって特徴づけられる。ここで注目すべきは、韓国語母語話者は初級であれば右側グループに入っているが、上級になると左側のグループに変わってくるということである。習熟度の上昇による変化の幅という点について言うと、中国語母語話者よりも韓国語母語話者の方が変化の度合いが大きいことが示される。最後に、次元2の負の方向に注目すると、中級から上級前半の英語母語話者が含まれ、また、これは異なり語数によって特徴づけられることがわかった。英語

母語話者は韓国語母語話者と同じように、初級であれば右側グループに入り、中級になると左側のグループに変わってくることが確認された。習熟度の上昇による変化の度合いも比較的に大きいと言えるであろう。

以上をまとめると、中国語母語話者は上位語の一致率の高さと語彙レベルの高さという点によって他の学習者とは区別されることがわかった。一方、習熟度の上昇に伴う変化の大きさについて言えば、韓国語母語話者と英語母語話者が比較的大きく、中国語母語話者は比較に小さいことが確認された。

5. まとめ

以上、本研究では、中国語母語話者の外来語使用特性を明らかにするため、韓国語および英語母語話者、また日本語母語話者のデータと比較した。外来語使用に関して、RQ1 では中国語母語話者は外来語のなじみの少なさが注意深い外来語使用に繋がり、結果として日本語母語話者と相対的に類似した外来語使用パターンを示していること、RQ2 では中国語母語話者の使用傾向は多くの点で他の母語話者とも共通するものの、全体として外来語使用を回避し、真に自信のあるものしか使用しないため、誤用がほとんどないこと、RQ3 では中国語母語話者の外来語使用は、上位語の一致率の高さと語彙レベルの高さという点によって他の学習者とは区別されること、また、習熟度の上昇に伴う変化の大きさについて、他の母語話者と比べ比較的に小さいであることがわかった。

引用文献

- 安榮花(2011)「日本語学習者に対するカタカナ語教育の問題と提案」『玉藻』(フェリス女学院大学国文学会), 46, 55-66.
- 岡本佐智子(1996)「外来語の習得ストラテジー:中国で学ぶ中国人研究者に見る外来語の中間言語」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』, 23, 97-109.
- 国立国語研究所(1962)『現代雑誌九十種の用語用字』東京:秀英出版.
- 戸田貴子(1999)「日本語学習者による外来語使用の実態とアクセント習得に関する考察:英語・中国語・韓国語話者の会話データに基づいて」『文藝言語研究(言語編)』, 36, 89-111.
- 鄧琪(2017a)「渡日留学生のための重要外来語語彙リストの開発:アカデミック・ジャパニーズの観点から」『統計数理研究所共同研究レポート』, 373-374, 89-104.
- 鄧琪(2017b)「『外来語』言い換え提案」に対する一考察:朝日新聞データベースを用いた計量的調査をふまえて」『電子情報通信学会技術研究報告』, 117(81), 19-24.
- 吉廣綾子(2003)「日本語の無声子音・有声子音, 中国語の有気音・無気音の比較:日本語母語話者及び中国語母語話者の発音を比較して」『徳島大学国語国文学』, 17, 1-13.
- 羅濟立(2010)「カタカナ語の習得についての事例研究:LARP at SCU による縦断的資料の分析から」『台湾日本語文学報』, 27, 219-240.